Vol.80 アイ・ラブ・マクドナルド！



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

オレにも言わせろ！

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

1月は正月で酒が飲めるぞ～♪
2月は豆まきで酒が飲めるぞ～♪
3月はひな祭りで酒が飲めるぞ～♪
4月は入学式で酒が飲めるぞ～♪
5月は田植えで酒が飲めるぞ～♪

という訳で、酒が飲めない私の2014年前半を振り返ってみよう。

1月は筋トレの日々であった。ありがたいことに長沼町には「りふれ」という町営の多目的に利用できるジムがあり、汗を流した後は、税金で購入された重油で温められた風呂に浸かり、寄付したオムロンの体脂肪・体重計に乗るのが日課だ。

14回の住基カード式タダ券と1カ月の定期を購入しても250円で利用できるが、毎回会うメンバーは限られている。一国一城の商店街オーナー達、自衛隊員、スノーボードのオリンピック候補者や外国人などだ。そして、本来であれば、右脳と体力勝負の公務員、JA職員、土地改良区職員や現役農業生産者とお会いできないのは残念である。

この「りふれ」には冬季のみではあるが**6年間、休館日以外はほぼ毎日通っている**。なぜ、老体に鞭打ってジムに通うことになったのか？　もしかして、ハードなプレーに耐えるためか？

3月からの飛行シーズンを目の前にしてフライトチェックを指導教官から受けるのが所属クラブのルールである。飛んでいる実感をガーンと味わえるクイック操作で2G（重力加速度）近くの旋回をしたところ、目の前の視野が狭くなり、頭がキーンとなった。ついに来たか「ブラックアウト現象」と自覚した。先輩たちの経験や航空医学の勉強会で知っていたのでビビリはしなかったが、高いGが心臓から脳への血流不足によって起きる現象で、それが6年前のことだった。

そのことを9Gにも耐えられる訓練をしてきた元航空自衛隊のパイロットに話すと、走り込みと筋トレを行なうのが一番効果的だと教えてくれた。何かのビンビン的サプリを飲んで対応できる訳ではないので、その冬から「りふれ」に通うことにした。4カ月近くジム通いをした成果はあった。再び訪れたシーズン前のフライトチェックではブラックアウト現象はなく、その他の高G機動でも頭はすっきりしていた。

バンク角60度の2Gやりました！

やはり日本で食べるのが一番

2月は東藻琴（大空町）の生産者と米国ツアーに出と、はっきり書けない理由がある。機体の強度に関する安全性に問題はないが、「やりました」と書けば無用に航空法ならびに航空法施行規則上、曲技飛行では？とのご指摘を航空局から受け、召集令状が届く可能性があるからだ。

かけた。ケンタッキー・ルイビルのショーは室内では全米一の規模である。もう5回ほど行っているのでホテルや交通機関の手配はストレスなくできて、入場料もケチィ、ヨーロッパと違い無料である。今回はある商品の下調べも兼ねていた。

15年以上取引をしていたある会社が断りもなく日本に代理店を作り、私には直接販売しないことになった。怒ってみたところで解決する問題でもなく、ネットでより頑丈な物を作るメーカーを見つけたので、現物を確認することにしたのだ。

ショーの後、ケンタッキーを離れて取引先のノースダコダ・ファーゴに向かった。デルタの乗り継ぎはデトロイトだった。ランチはどこにしようかとあたりを見渡すと何やら日本語を意味する文字が見つかった。

海外ではあえて日本食は食べない。だって日本で食べるのが一番なのだから。その時はちょっと様子が違っていて、**壁のネオンには「SORA」**と書かれていた。ん? 空のことか? と下の方を見ると、日本食、すしバーとある。

この瞬間、**コラムの新鮮なネタの提供をありがとう♡**と思った。そうなると足は店の方に右向け右だ。こちらから気さくな演出をカモシ出すため「こんちは~」と店に入ると、入口にいた30歳くらいのアジア系のホストから間髪入れずに「いらっしゃいませ」と、よどみのない日本語が帰ってきた。なんだ? マジホンの日本人か。がっかりして、スシカウターに座った。

さて何を頼もうか、と悩んだが、とりあえずサケ、マグロ、ツブを頼んだ。値段を見ると3・5ドルと記載されてあった。たぶん一貫(2個)なのだろうと勝手に想像したのが間違いだった。今どき**不味い寿司**なんて日本国内には存在しないだろう。だが、このデトロイト・メトロポリタン空港には普通に存在するのだ。**サケはパサパサでマグロは血合いがドロドロ、ツブは3歳男児の皮被りの先端状態**であった。

本来であれば、板さんと異国で働く苦労話で盛り上がりたかったのだが、こちらから「何かおススメありますか?」と聞いても、彼は決してこちらを向かないでウエートレスと英語で子供の話をしていた。もちろん日本なまりの英語ではなかった。

スシが来る前におすすめの5ドルの海草サラダを頼んだが、箸を一口つけてやめた。だって海草っぽい緑色のゼラチンにドレッシングはラー油がバケツで入っているような味付けだ。最低限のチップを置いてさっさと席を立った。

ファーゴに到着する前にもう1カ所乗り継ぎをした。ミネアポリス飛行場だ。マトモな日本食を食べてやるぞ!という変なリベンジ・スピリットに燃えた。この飛行場には20回以上来たことがあり、確か日本食レストランがあったと記憶していたが、場所が定かではなかった。そこで案内のところに行き「確か日本食のレストランがあったはずだが?」と聞くと満面の笑顔で最近新しい日本食レストランができたという。

人差し指が置かれたマップにある**PARK**ってパーク(公園)か? 親切な案内は**「これはパクと発音する」**と教えてくれた。その5分後には56歳でもマックのクオーター・パウンダーを頬ばることができる自分は幸せだと心から感じた。

米国人へのお土産作戦

2月のファーゴは普通に寒い。朝はマイナス30℃、日中でマイナス15℃だ。この町にある会社と取引を初めて30年になるが、会社との取引というよりも担当者個人との信頼関係のウエイトが重要だ。

その担当だった72歳のボブが退職することになり、新人の担当者への引き継ぎのために、挨拶を兼ねてこの極寒の地に訪れた。以前は農機部門と建機部門が別棟だったが、今では総勢80名の事務所になった。そこで手ぶらで行くのも寂しいので、お土産作戦を考えた。

さて、**米国人がもらってうれしいお土産はなんだ?** 答えはドーナッツだ。ファーゴに到着後、最低でも全員が2個食べられるように200個、250ドル分を用意した。ハーニーデイップ、フレンチクルーラー、ゴールデンココナッツなどを嫌いな米国人は存在しない。

残念なことに米国よりも南半球の金髪・ブルーアイであるオーストラリアのほうが平和的な国と思っている若い日本人は多いようだ。

1948年12月23日にオーストラリア出身の極東軍事裁判長の命により絞首刑になった7名のA級戦犯と呼ばれた人たちや、捕虜にゴボウを食べさせ、お灸などの治療をしたB級戦犯、C級戦犯の900名もの祖国を愛した命がなぜ消えていったのか――。その事実を知ろうともしない若者にメリークリスマスだな。

ちなみにこの裁判長が生まれ、弁護士資格を取り、州の最高裁判所長官だったクイーンズランド州では、終戦の23年前の1922年から死刑制度は廃止されている事実をお伝えしておこう(オーストラリア・Yahoo調べ)